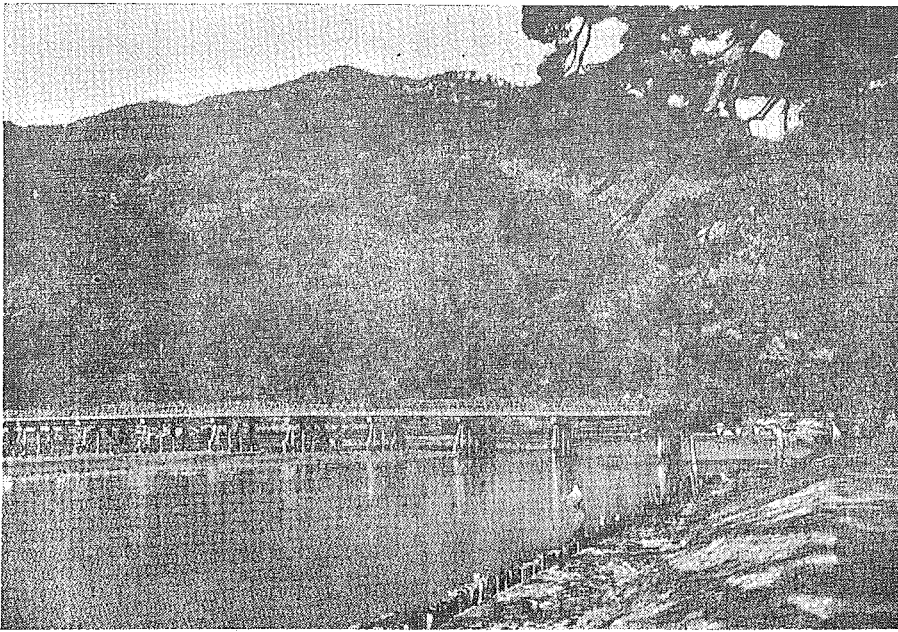


# 洛友会々報

京都市左京区吉田  
京都大学工学部  
電気科教室内  
洛友会



嵐山ノ学生時代に嵐山を訪ねなかつた人は一人もあるまい。それほど我等には親しみ深い存在である。今回総会々場に選ばれたのも、うべなるかなである。総会の日を旧友に逢う気持ちで待とう。

## 歐米雜感

林 千博

私は昭和三十年秋より約一年足らずフルブライト交換教授として米国の Massachusetts Institute of Technology に滞在し、その後三月ほど歐洲を廻つて昨年十月に帰国しました。MIT では自動制御の研究、非線型振動の講義を致し、その後歐洲では自動制御、非線型力学等、小生の専門に関係した大学・会社の研究所を訪ね、また鉄道交流電化の現状を見たり、プラツセルで開催された第九回国際応用力学学会、ハイデルベルグにおける自動制御の学会等に参加する機会を得ました。この会報の紙上を借りて帰朝の御挨拶少々滞外中の印象を二、三申し上げたく存じます。

先づ授業について。日本の学生に較べて MIT の学生の態度は合理的です。訳判らずにノートに丸写しすることはなく、不明の点があれば講義中盛んに質問して納得するまで聞きます。当然のことながら勉強をするために大学に來ているのであるから、真剣に講義を聞き、理解を確実にするために学生から宿題を要求し、休講を好みません。従つて先生も殆んど休講しません。止むを得ず休むときは代りの先生が休んだ先生の講義をします。学力の低い学生には先生が少し程度の低い大学を紹介すると本人もその方が結局自分のためであると納得して転校します。日本の学生が卒業資格のために著名大に殺到し、試験のために勉強するのは学歴が一生付き纏う社会制度の罪でしょう。少し脱線しますが、派閥や縁故に捉われず、実力を認めて伸ばす社会を作りたいものです。西洋文化を取入れ洋服を着ても、我々の根本精神は昔の封建時代

と余り変わりなようです。

研究について。能率的であるか無いかという点を除くと、戦時中の日本と似た状況です。MIT は米国内大の中でも特に軍に協力して実績を挙げている大学の一つで、莫大な経費が軍で賄われています。何んと言つても核兵器の改良、それを目的に運ぶ方法及び相手からの攻撃を如何に防禦するかという三つの問題が主要研究で、これ等に附随して超音速飛行、誘導弾、耐熱材料の研究等が昼夜兼行で行われています。原子力発電等の平和利用は未だ影の薄い存在で、南極探検等は全然新聞にも載りません。尤も一部の米国人は科学特に兵器の異常発達を憂慮しています。所謂 Cultural lag と称するのは、かゝる情勢を心配して出來た言葉でしょう。併し纏つて日本のことを考えると、何時まで経つても外國の模倣に明け暮れ、調査団の派遣を繰り返して、未梢的な研究に終始していることの多いのは残念な次第です。

英國の大学。オックスフォード、ケンブリッジのような古い学校は米国の大学と比較すると可成り趣きを異にします。創立以来、数百年を経たこれ等の大学では、たとえ近年勃興した科学分野の学生に対しても伝統の徳性教育が重視されていることは当然のことながら、さすがと思われま

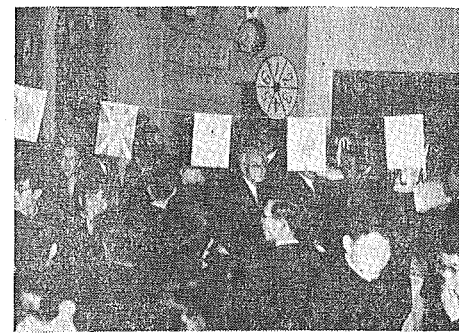
二、三の人々について。MIT 機械科主任の Dean Hartog 教授は私のスポンサーで、曩に客員教授として東大に三ヶ月ほど滞在されたこともあり、大層親切にして頂きました。日本趣味の豊かな人で、浮世絵や漆器を蒐め、目下自宅に茶室を建て、源氏物語を愛読しておられます。滞日中同氏は北海道から九州まで旅行し富士山にも登つたそうですが、偶々ボストン郊外にあるロングフェロ

の家(内部は記念館になっています)の前を通つたとき内部を見たところがあるかと尋ねますと "I can see no horror." と言つて笑つていました。

Dr. van der Pol デュエーヴの美しい宮殿のような事務所。C. C. I.R. の所長としておられます。七十才を過ぎた饒樂たる老人で Van der Pol の方程式について滔々と十分ほど黒板に書きながら話されたのは敬服しました。レマン湖を見下ろし遠くにモンブランの白峰を望む立派なアパートに住んでいます。が、その内に故国オランダに帰つて、事務を離れた研究生活に戻りたいと言つておられました。

Dr. N. Minorsky 元スタンフォード大学の客員教授でもあつたロシア生れのこの老先生も非線型力学の大家で、プロバンス地方の大きな農場に住んでおられます。近くのゾラの運河(エミールゾラのお父さんが作つた由)から水を引いたお宅の辺りは如何にも南仏らしい長閑な田園風景で、近くにセザンヌの絵に出てる山もあります。ロシアのロマノ

予饒会(教室)



フ王家、最後の皇帝の娘さん(と言つてもお婆さん)も遊びに来ていて二、三日ゆつくり泊めて貰いました。

尚、帰路スペインに立ち寄り、マドリッドのブラドの美術館、トレドのグレコの家、グラナダのアランゴラ宮殿、サクロモンテのデプシー部

### ◎教室だより

#### 一、教室の整備

従来からの懸案であつた教室配電盤の整備統合計画は、昨年七月開始し九月に完成した。又それと同時に教授室入口にあつた在室標示燈を整備拡充し、教室玄関にも増設して、そこで在・不在が明示されるようになった。

或る人曰く「標示燈は教官の出勤成績表なり」と。

また教室の照明器具の大部分は開設以来の旧態依然たるもので、古きを誇つてゐる(?)かの感があり、従来より屢々近代化の計画もあつたが、延び延びになつて来たところ今般、日立製作所その他の御好意により教官室・研究室・廊下の照明器具百余个を全部蛍光灯に改め、面目を一新する事となつた。完成は三月中旬の予定である。

#### 二、予 饗 会

本年度卒業予定の大学院学生十四名及び学部学生五十八名に対する恒例の予饗会を、二月六日午後三時より乗友会館において開催した。出席者は二百名に及び会場の定員を超過する盛況であつた。

先づ関西電力株式会社常務取締役芦原義重氏の「電力需給の見透しと欧米雜感」なる題で、有益なお話を伺つた後、外遊中の天然色フィルムによる映画を鑑賞した。次いで当教

室職員及び学生よりなる懇話会オーケストラによる室内楽演奏があつた。

次に電子三回生橋本道也は若柳流日本舞踊の淡いところを見せ、漸く七時前に至つて立食による晩餐会に移つた。会場は万国旗で飾られ、会は先づ型通り会長始め卒業生・在校生の代表の挨拶に始まり、宴酬の頃、やおら持ち出した風車射式の福引に移り、一等より十等までの賞品が授与された。

次いでテーブルスピーチを始めるや、学生が我れも我れも演壇・マイクを占領、司会者も啞然たる有様、何時果てるとも知れず、予定の時間を過ぎること一時間、八時半過ぎに山村洛友会幹事の発声で、教室の萬歳を三唱して漸く楽しい予饗会の幕を閉じた。

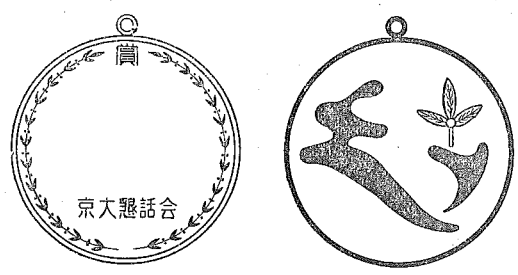
尚、本予饗会の開催に対し、関西在住の先輩三十八名の諸氏より多額の寄附を受けた。こゝに厚く御礼申上げる。

#### 三、優勝盃及びメダル

前号に報告した他に今般、松下電器産業株式会社より、更に一個の優勝盃が寄贈されたので、新たに松下盃と名付け、将棋大会の優勝チームに授与する事とした。こゝに謹んで御礼申上げる。

一方、懇話会においては右の優勝盃の他に、優勝チームの各個人に贈る優勝メダルの図案を本学建築工学科森田教授に依頼し、写真のような立派なメダルを作製した。メダルの銅地金にイブシ銀メッキしたもので、表面には電気的Eと優勝のVとを象徴化し、Eを擬人化し、Vを植木鉢化したものである。裏面には京大懇話会なる文字を浮彫りにし、年度をポンテし原盤を永く使用出来るようにしてある。

四、対阪大戦 予試合



大阪大学電気及び通信両教室と、当電気及び電子両教室との懇親対抗試合が竹川・大久保両教室主任の話し合いにより初めて去る一月廿六日午後一時より阪大東野田グラウンドで開催された。

その結果は

一、野球 ○阪大10―2京大  
下馬評では、野球は京大が断然強いとこのことにて、懇親の実を挙げる意味から圧勝するのは面白くないので、最初阪大に十点位に献上した後、徐ろに料理する作戦で予定通り阪大に十点を与えたが、この方の打撃は事志と異り、最後まで二点しか入らず、相手に名をなさしめる始末となつた。

一、庭球 ○京大7―2阪大  
一回戦 ○京大7―2阪大  
二回戦 ○京大7―2阪大  
戦前の予想では阪大には吹田・山村の両教授を始め、名手が手ぐすね引いて待ち構えている事もあるもので、よほど種を締めてかゝらねば勝つことは難かしいと思われていたが、結果は意外にも右の如く京大の大勝する処となつた。

試合終了後、阪大の招待による夕食会が工業クラブで行われ、交々起つて懇親試合の意義と喜びとを強調した。

尚、この催しは、今後年一回定期的に秋に開催する事とし、明年度は本学グラウンドに阪大を邀え撃つことになつてゐる。

#### 五、謝 辞

以上にて昭和卅一年度の教室及び懇話会関係の報告は全部終了したのであるが、特に本年度は出来る限り学生の希望に副うよう努めた結果、懇話会の会費を従来の約一・五倍に増額すると共に更に洛友会並びに関西在住の先輩諸兄より多大の援助を受けた。即ち

本年度の総支出一七四、九四九円に對して

懇話会々々費収入 八九、四七三元  
洛友会の寄附 三五、一二六円  
関西在住先輩の寄附 三四、一〇〇円  
応用科学研究所の寄附 四、二五〇円  
その他 一二、〇〇〇円

計 一七四、九四九円  
となり、所要経費の約四九%は外部からの寄附によつて賄われていることが判かる。本年度における懇話会の行事を終るに當つて御援助を賜つた各位に深甚な謝意を表する次第である。

○加藤教授は本年十月廿八日に停年満期になりますので、その記念会の催しにつきましては何れ御依頼を申上げますから宜しくお願い致します。記念会は十一月二日(土)の予定であります。

#### 福岡だより

九州電力では予て鹿児島県霧島発電所でチメン酸バリウムを応用した

遠隔制御を阿部・田中両先生の御指導のもとに計画、工事中の処このほど好成績裡に竣工しましたので、両先生をお招きして、現地を見て頂くことになりました。これを機会に二月廿六日両先生が福岡御宿泊の一夜を御都合お願ひして福岡在住の洛友会々員が集まり、菊水中の夕食会を催しました。偶々来福中の河本九電長崎支店長を交えて集つた者十一名、両先生を囲んで楽しい一時を過ごしました。宴酬にて各自の自己紹介の後、阿部先生より電気工学教室の近況、電子工学教室誕生の意義、内容等についてお話があり、一同の話は何時まででも尽きる様子もありませんでした。が、両先生には長途の御旅行でお疲れの事とて、名残りを惜しみつゝ九時過ぎ散会しました。

#### ▽出席者△

- 高柳与四郎(大 三)
- 金子 義 憲(大 六)
- 脇山俊一(大 四)
- 宮田 秀 介(大 五)
- 岡 本 勝 寿(昭 四)
- 河本 誠 一郎(昭 十一)
- 加来 誠 一郎(昭 十一)
- 安田 振 之 助(昭 十二)
- 杉 村 英 男(昭 廿一)
- 古城 戸 正 隆(昭 廿一)
- 深 町 藤 吉(昭 廿二)

#### 十四日会例大会の記

経済企画庁の鉱工業生産指数が予想を上廻つて百何パーセントであつたとか、電力需要の増加が平年の倍気となるると五十二才から六十才までの働き盛りの十四日会々員は益々多忙を極めている。東京―大阪間を月三回往復している人も珍しくなく、毎年誰か外遊している。こう忙しくなる

# 第六回洛友会総会通知

一、日 時 四月二十八日(日) 十一時

二、総会および懇親会場 嵐山。嵐峽館(電)嵯峨一番

三、総 会 十一時三十分より

議 案

一、事務並に会計報告

二、会則一部変更の件

会則第十二条「正会員の会費は年額三〇〇円とする」とあるを、「正会員の会費は年額四〇〇円とする」と改めんとする

理由 名簿並に会報の印刷発送に費用嵩み収支のバランスがとれなくなつたためである。

四、懇 親 会 十二時三十分より。余興福引あり

五、散 会 十五時の予定

六、会 費 昭和十一年以前卒業の方 七〇〇円

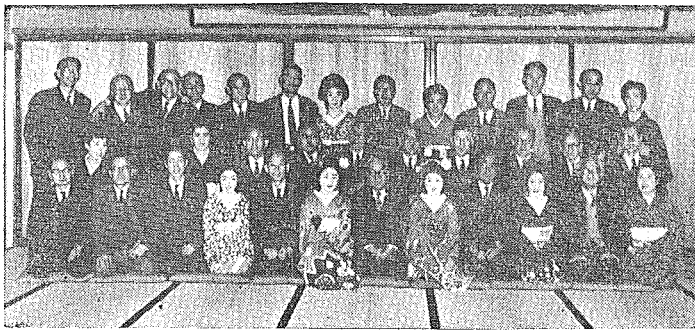
昭和十二年以後卒業の方 五〇〇円

会費は別紙振替用紙をもつてお払込み下さい。尚振替用紙の裏面に御参加および御希望の詳細を記入して四月二十日までに到着するようにお送り下さい。

と一番大事なのは健康で、ゴルフの如きも社員垂範の点からは社用族の汚名を受けざる配慮を要する立場にある人たちではあるが、保健上出来るだけ時間を作つて要領よくやる必要の年輩にもなつてゐる。

昨年六月梶谷・栗田両氏の永訣に遭つたのは誠に痛恨の極みで謹んで哀悼の意を表する。

第七十回例会大会は一本松・芦原両氏が帰朝早々のことでもあり、年末年始の宴会続きの時期でもあつたので第七十二回に持ち越して、二月十四日京都東山の「京大和」にて開催。会員四十一名中十八名の出席は、地の利を得なかつた故か、或は二、三日前から急に冷え込んだ故か少々淋しかつたが、また御案内申上げた諸先生のうち鳥養・岡本・七



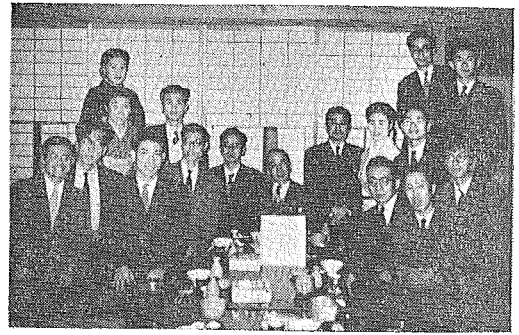
里・阿部四先生の御来臨は得なかつたが、加藤・松田両先生がお越し下され大久保・林(重)・熊谷三先生の御出席と、教室若手の新進教授の御参加を得て甚だ盛会であつた。例の如く欲談湧くが如く、また祇園美形の芸術鑑賞と祇園小唄の合唱。

御自慢の隠し芸の御披露を御希望の向きもあつたが、可なり時刻も過ぎて居り、諸先生始め大阪に帰る一般会員の御迷惑もあり、同好諸氏で別席でやつて頂くこととして散会の止むなきに至つたことは、誠に申し訳ない次第で、茲に記して陳謝の意を表す。(K)

写真(向つて右より)  
前列 林(重)、大久保、加藤、松田、大谷、岐美、青木。  
中列 近藤、鹿田、西、瀬川、片岡、藤田、熊谷、口羽。  
後列 木村、清野、吉田、前田、今田、幸前、渋谷、一本松、木津、小宮。

## 島津洛友会

卅一年十二月廿二日  
祇園 紅粉屋  
林(千)、大谷両先生をお招きし会



員十六名中、十二名が出席。  
林(千)先生の優美なスライドに欧米の風物詩を眼のあたりに見せて頂き一同陶醉の極に達したとき散会した。(梁山孝雄記)



## 北陸昭七会

新春早々、小柳美一君が東北に栄転することになり、これを機に小雪の降る正月二十日送別の宴を催した。ところは金沢で有名な浅野川畔母衣町「みふく」に於て、相会する者は写真に見る通り。案内には妻君同伴たるべきこと、若し叶わぬとき



は、これに代るべき者として東は高岡、西は福井から雪の列車に気を配りながら(この日の延着はもう小柳君の責任外)定刻正午に全員よく集まる事が出来た。妻君同伴は今度が初めてだし、初顔も多い事とて、何んがか勝手が違う。互いに紹介やら何やらで、ひととき賑わった。長田君だけ大切にしまつて来た。一寸テレる(流感のためとかで無理もない)。

裏たけなわなるや、日ごろ隠し持った珍芸を(多分妻君はご存じあるまい)さんさんブチまけた。公認記録を取る魂胆だったのかも知れない。綺麗どころの踊りも後半のために披露出来たのは、幸福(?)そのものであろう。小柳君は多忙で中座したが、あとは小柳夫人を擁して夜の部に移る。よく語り、よく唄い、よくきこし召して、二十年の皺を伸ばしたのは、あながち今流行の初期恐妻症状の現われの故のみではあるまい。

帰路を急ぐ終列車に、やつと間に

あうほど名残りを惜しみつゝ、再会を約し、雪の金沢を後にした。石川・萩原両夫人には、交通不便の精とは言え、少しロードが重過ぎたようだが後日の難感である。それかあらぬか萩原・長田両君は金沢泊りと相成った。これは後日譚にしてこの稿を終る。(企画萩原・記事西岡)

【写真】後列Ⅱ石川、長田、西岡、萩原

前列Ⅱ女将、石川夫人、小柳、小柳夫人、萩原夫人、西岡夫人

### 会費領収

昭和卅一年度(第五回) 続き

三〇	中堀 増夫	高橋 義造
	池田 成二	天谷 規夫
三一	竹内 哲	
	向田 竜	永野 勇
	杉山 宏	桐野 巍城
	穂積 亨	井上 幸夫
	小林 亮	津田 剛志
	柴谷 善郎	

昭和卅二年度

大八	神保 成吉	
一一	大山 嘉介	
一二	後藤 嘉明	
一四	口羽 玉人	水内 浩
三三	三砂 延治	
八	塩見 武夫	
九	河村 泰雄	
一〇	林 潔	
一六	三滝口 哲朗	
二六	岡橋 保清	
二七	加子 泰彦	
二八	松村 晋	籠 宗和
二九	藤田 実	

三月十六日より到着の分  
自昭和廿八年度  
至昭和卅一年度

昭一七	今西 久弥	
自昭和廿九年度		
至卅一年度		
昭二一	野田 栄一	
二五	東 輝久	
自昭和三十年度		
至卅一年度		
昭二一	片鎌 秀雄	
二四	阪根 明	
二八	川端 昭	
二八	新井上 誠一	
昭和卅一年度(第六回)		
一月十六日より到着の分		
三月十日まで		
明四〇	山本 和七	
四二	浅尾新十郎	
大二	浜西 伝次	
二〇	岩本 勝弥	
二二	土方鹿之助	羽村二喜男
	土屋 弘成	
一四	佐々木英四郎	吾郷 侃二
昭二	大島 文平	坪井 好人
三	百束 極	
四	竹上 武雄	小西 市信
五	中谷 哲夫	和田 正弘
六	石垣 梯次	溝口 毅
七	進藤 陽吉	西岡 敬二
	藤野千代治	井上 勅夫
八	浅田 英直	田中 信高
二	土井 虎男	
三	真弓 克己	岡谷 繁雄
一四	国富佳寿郎	藤田 隆正
一六	三宮下 一雄	俣野 弥造
一七	珠玖 泰吉	曾谷 康夫
一八	小田 敏彦	田中 輝次
一九	竹下 敏彦	長谷川治郎
二〇	伊藤 美暢	宗雪 満夫
二一	山根 明	
二二	田村 茂男	
二四	三浦 武雄	

二五	瀬野 健治	牧野 英夫
	山口 四郎	
二六	野中 清文	岡林 茂樹
二七	木村 陸朗	
二八	松崎 司郎	佐藤 和夫
	井垣 壽生	高田 昭
二八	新宝居 繁美	
二九	山口 俊夫	
三〇	高橋 文彦	
三一	安井 貞三	九鬼 一夫
昭和卅二年度		
大一二	佐々木英四郎	
昭二	大島 文平	
一七	森田 英男	
二九	山下 義雄	

### 会員消息

石沢 四郎氏(大四)関西支部長。去る二月廿七日病氣のため死去せられた。

清水 義一氏(明三七)元電気教室教授。三月廿四日病氣のため死去せられた。

以上は霊前に本会より弔詞を呈しその冥福を祈つた。

松田長三郎

今回鳥養先生の御推挙と学園理事会の懇請を受け去る二月、成安女子短期大学長並に理事に就任致しました。電気工学や、従来の京都技術科学館長(理事長石川芳次郎氏)の他、不肖ながら女子教育にも余生を捧げたく存じますので、この上とも御支援御鞭撻の程お願い申上ます。

### 編集後記

〇久し振りだ。久し振りだよ「お富さん」と言いたいほどに、久し振りに編集後記の筆を執ることが出来た。妙に嬉しい感じがする。

〇毎号を四頁建にしている。これは会費が百パーセント集まらないので、山村幹事が財布の口を開かないのである。総会で会費の値上げをするという。何にしても会費が値上げになったら、時々ペーシが増して貰えるだろうと楽しみにしている。

〇かような理由で四頁建を厳守すると、原稿が一杯一杯、少しオーバーして一部割愛せねばならぬこともある。

編集後記の欄など割当て、貰えない。そこで今回は後記が書けて嬉しい訳である。

〇会員には原稿の書けない人は殆ど居ないので不思議に書かない。もつと活潑に会報が賑かにならないかと思う。

〇クラス会は盛んになつて来ている。処が、その模様を会報に出さないのが多い。決して御馳走食いのコンクール発表ではない。クラス会の中に生れた有益な雑談がある。そんなものを発表して貰いたいのである。

〇海外視察に出た人は、端書一本で良いから、海を越えての消息を聞かしてくれたら、会報上に美しい花が咲くのである。まして外国から随想、見聞記などを寄越して貰えたら、花だけでなく香気をも発するであろう。

〇だんだん、ぐちづぼくなつて来た。どうぞ編集小僧をワツと驚かすように、原稿をジャンジャン送つて下さるようお願いして万年筆にキヤップをかける。(工藤)